

ニューヨークタイムズ紙「シークレット・ライフ・オブパスワード」

(大学生編)

三田キャムパス

パスワードと聞いて思い浮かべることは何だろう。セキュリティ性の高い、他の誰にもわからないような暗号。これがまず思い浮かぶ答えかもしれない。しかし中には、パスワードのたった数文字の中に願をかけたり、大事な記憶をこめたりする人もいる。ニューヨークタイムズのリヨンさんは、9.11以後、パスワードに関心を持ち、様々な人にその所以を聞くインタビューを行ってきた。家族の話、恋人の話、くすっと笑ってしまうようなエピソードから、その人の内面深くに関わるエピソードまで、たった数文字の情報から話は広がった。パスワードはセキュリティだけに重きを置いて作られるだけではないこともあるのだ。

パスワードについて話をしてみる。今回ニューヨークタイムズが持ちかけ他の試みの一環として、私たちは同世代の身近な友人たちに、彼らのパスワードにまつわる話を聞いてみた。生年月日、自宅の電話番号、名前。日本の大学生の多くは、覚えやすさと単純さを重視するようだ。その中で、個性的なパスワード設定をする人の話は興味深く、印象に残った。

「やはりパスワードは忘れないことが肝心。あれほどの印象的な出来事はそうないので忘れないですね。」

現在大学生のある女性は、小学生のころのアメリカでの家族旅行の地をパスワードとして使用している。そこは大自然という言葉がふさわしい、何とも非現実な場所だったという。家族で車に乗っている時、バッファローが車の横を通り過ぎた。その記憶は今でも鮮明に脳裏に焼き付いているという。

大学2年生の男性は、中高時代の部活の背番号を並べたものをパスワードにしている。パスワードは四桁の数字だが、中学の野球部での最後の背番号と高校のハンドボール部の背番号は、特に大切だと語る。野球部では、初めてもらったポジションの背番号から、強くなろうと地道に練習を重ねた。そして最後には、守備力が評価されて目指していた番号までたどり着いたのだ。また、ハンドボール部の背番号は、一つ上の代の憧れだった先輩から受け継いだ。

「毎日死ねって言われてきた、一番辛い時代は乗り越えたと思う。」

練習は苛酷だった。苦しくて辞めようと思ったこともある。しかし、同期や先輩がいたから続けた。今でも部活仲間とは定期的に会うという。パスワードの数字は、彼の最も辛かった記憶と、仲間と、誇りが相まって彼の中に刻まれている。

一方で、パスワードは自分でつくるもの、そんな一般的な考えに反して、家族に作っても

らったパスワードを大切にしている女性もいる。作ってもらったのは小学六年生ごろ。大学生になった今もそのパスワードを使用している。便利で愛着があり、変えようと思ったことは一度も無いという。

「複雑なパスワードっぽいパスワードができて嬉しかったけなあ」

作ってもらった当時のことを彼女は振り返る。小学生の幼い自分には、まわりにわからない、かつずっと使えるようなパスワードを作れなかった。そこで彼女の父親が、セキュリティのことも考えてパスワードを作成したようだ。パスワードを家族に決めてもらったことに関して、特別な思いはないと言うが、家族との関係はとても良いと話す。

「いい距離感を保ちつつ、大切にされているというのはすごく感じる。いい家族。」

長く愛着をもって使っているのは、変える必要がなかったというのものもあるが、大切な家族が作ってくれたパスワードを変える理由がどこにもなかったからなのだろう。

彼らに共通するのは暗号としてのありきたりなパスワードではなく、「自分だけの」パスワードを作成している点だ。セキュリティのためのパスワードでも、それは写真のようにその人の人生を刻み込むことができる貴重なツールの一つになり得る。たかがパスワード、されどパスワード。無機質な画面に打ち込まれていく数文字は、驚くほど多くの記憶や思いで満ちているのかもしれない。